

(始良郡隼人町大字小田字塚原他)

### 位置と環境

遺跡は、隼人町小田の隼人塚団地内にあり、清水川の支流、笛吹川の右岸に立地する。標高14m前後の台地上にある。南下していた笛吹川が、本遺跡付近で大きく曲がり西流し、1.5km西で清水川と合流する。遺跡周辺は、北から南にかけて緩やかに低くなる台地であった。

### 調査の経緯

昭和48年、鹿児島県住宅供給公社による隼人塚団地建設工事に伴って、県教育委員会による調査が行われ、A～Cの3か所に散布地が確認されている。C地点が昭和48年12月、B地点（西公園）が昭和56年4～5月に発掘調査され、A地点（北公園）については、工事対象区から除外され保存されていた。その後、町教育委員会によって、平成11年3月に、作業用車両進入路工事に伴って、A地点の一角（第4次調査）が、平成14年2月には宅地造成工事に伴って、D地点の確認調査（第5次調査）が実施されている。

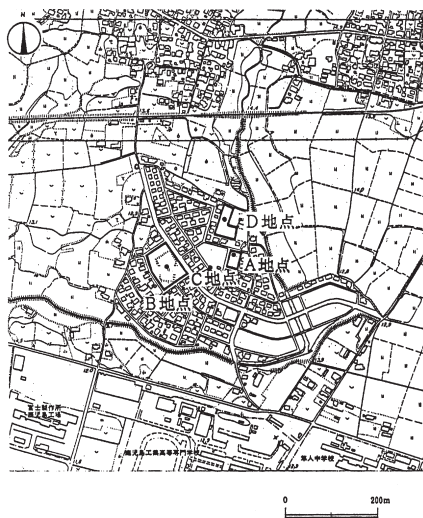
### 遺構と遺物

B地点では、弥生時代中期の方形状住居跡1軒、古墳時代の方形状住居跡2軒、特殊遺構3基、溝状遺構4基、奈良時代の方形状住居跡1軒が発見され

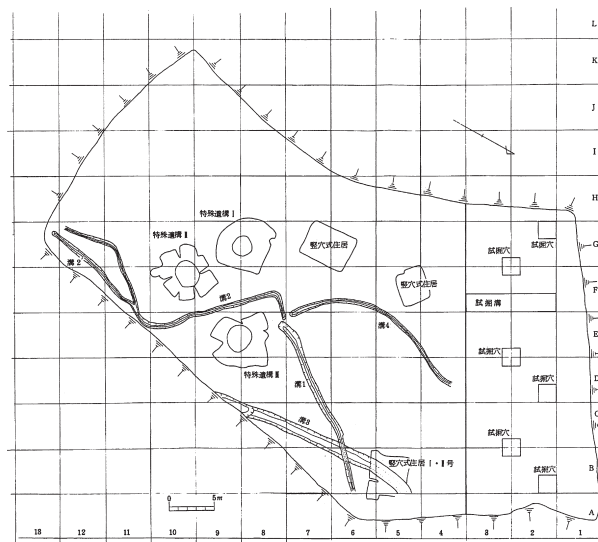


第1図 小田遺跡の位置

ている。弥生時代中期末の竪穴住居跡は方形状のプランで、 $3.1 \times 3.8$ m、深さ40cmで、20cmの貼り床がなされていた。古墳時代の竪穴住居跡では、I号が $4.38 \times 9.5$ mの方形状で、深さ40cmであった。附属施設として、 $2.4 \times 1.2$ mのベッド状遺構が検出されている。II号は一辺3.1mの竪穴であった。特殊遺構としたものは、張り出しをもつもので、I号の壁は円形と直線をなし、中央に土坑をもつ。土坑内から微量の炭が検出されている。II号は径3～3.4m、深さ38cmの円形の落ち込みを中心に一辺約2m、深さ10cmの張り出し部が7箇所、放射状に配置される。中央に微量の木炭、III号は径3m、深さ30cmの円形の落ち込みに深さ10cmの方形状の遺構が取り囲んでいた。中央からは焼土や木炭が多量に検出されている。ほかに、深さ50cmの溝跡も見つかっている。



第2図 小田遺跡A～D地点位置図



第3図 B地点遺構分布図

奈良時代の竪穴住居跡は、5.3×4.1mの方形で、深さ20cm、中央東寄りに径75cmの焼土跡をもつ。須恵器蓋等が出土している。

25×35mの範囲で小高く残されているA地点の一角を調査したのが第4次調査である。調査範囲は2.5m×5mで、その中に、古墳時代成川式期の竪穴状遺構、近代の溝状遺構・ピットがそれぞれ1基検出された。竪穴状遺構は深さ25cm、検出部分で東西3.2m、南北1.6mである。遺物も数百点採集されている。

D地点の第5次調査は、宅地造成工事予定地、約2,268㎡に4箇所のトレンチが設定され調査されている。中世～近世の竪穴状遺構・土坑・ウネ状遺構・ピットなどが検出されている。竪穴状遺構は径が5mで、深さ2mを越すもので、床面形状は隅丸方形をなし、傾斜をもつ。出土遺物から中世後期と思われ、上部がやや広がるラップ状を呈する。

**特徴**

B地点の花弁型の遺構や奈良時代の竪穴状遺構は

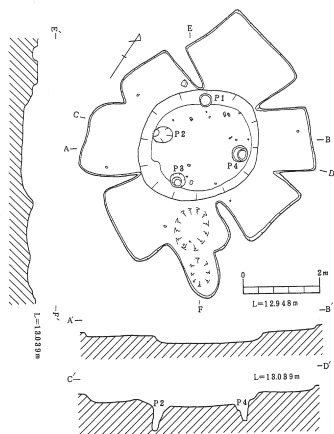
周辺地区内でも例は少なく、また、D地点の竪穴状遺構は、中世後期の地下室等施設の可能性も考えられ、貴重である。最も離れたB・D地点間の距離は、約200mである。その間のA地点でも多くの遺物が出土していることからみて、かなり広い範囲に弥生時代から古墳時代の住居跡が分布していた可能性があり、一大集落を形成していたものと考えられる。本遺跡周辺は該期には極めて重要な拠点集落があった可能性を示している。

**資料の所在**

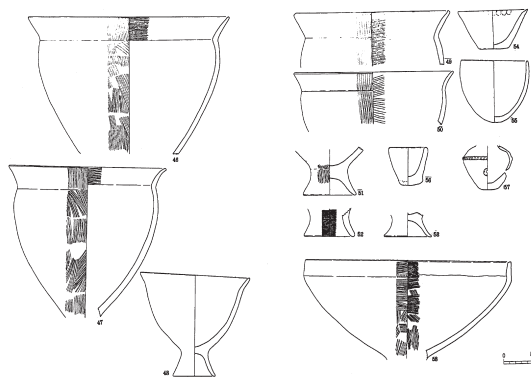
遺跡の大部分は宅地として造成されたが、畑地として残されている部分もある。第1～3次調査の出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。その一部は、隼人町立歴史民俗資料館に展示公開されている。また、第4・5次調査の出土遺物は、隼人町教育委員会に保管されている。

**参考文献**

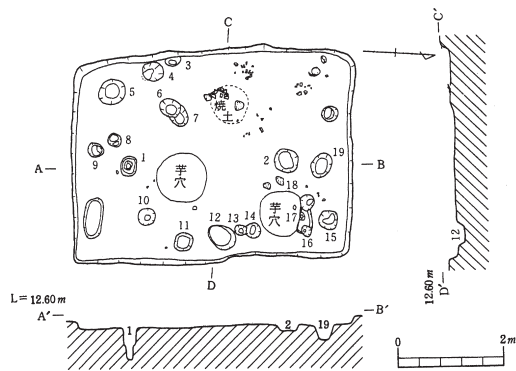
鹿児島県住宅供給公社 1981『小田遺跡—隼人塚団地B地点』 (重久淳一)



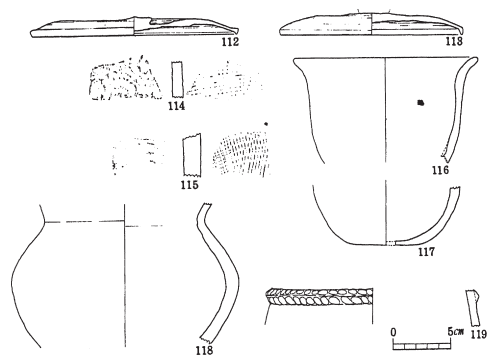
第4図 B地点特殊遺構II



第5図 特殊遺構II出土遺物



第6図 B地点奈良時代住居跡



第7図 奈良時代住居跡出土遺物